

ミャンマー国人身取引被害者自立支援のための能力向上プロジェクト

No.21/ 2014年5月8日

ヤンゴンからミンガラーパー

インフォメーションセンターの開所式など(5/28 予定)に向けて準備中

プロジェクトでは、インフォメーションセンターの間近にせまったオープニングに向けて、広報用パンフレットや相談表の作成、案内用の看板づくりなどの細かい作業に追われています。



相談表の内容を検討するインフォメーションセンタースタッフなど

また連携先の NGO や政府・国連機関などを一つずつ訪問し、リソーススペースのための資料を収集するとともに、支援のためのネットワークづくりに向けて、センターとの連携方法について事前の打ち合わせを行っています。

開所式と、同時に行うコーディネーション・ワークショップには、関連機関やセンターの連携先も招待する予定です。

また、この機会を活用し、第1回、第2回のTOT受講生を招待し、トレーナー会を開催します。開所式前日の27日に集まり、翌日のコーディネーション・ワークショップのリハーサルも行います。すでに3つのグループにTOT終了後どのように他機関との連携がうまく行くようになったか、具体的な例をあげて発表するようにお願いしています。トレーナー全員でリハーサルを行い、意見や情報を交換することで、情報をしっか

り共有するとともに、当日のフローを交えたディスカッションにも備えてもらうためです。

28日の午後は、ハンドブックの内容についてアイデアを出し合うワークショップを行う予定です。ハンドブックの普及活動もトレーナーが中心になって行うことになっており、企画の段階から全員に関わってもらいたいと考えています。27、28日の内容については、次号で報告する予定です。

連携先の一つ、職業訓練校(CVT)を訪問(5/6)

CVTはスイスの非営利団体で、2002年からミャンマーで若者の職業訓練に取り組んでいます。学校教育を受けることができない若者たちに市場のニーズにあった実践的な職業訓練を行い、社会に貢献できる人材を養成するのが目的です。

中学生レベルの子どもたちには4年間の基礎学習をしながら職業訓練も受けることができるコースがあり、交通費から食事、教材費など、必要な経費のすべてが提供されています。

その後は3年間の職業訓練コースに進むことができ、ビジネス一般、家具職人、電気技師、ホテル・レストラン従業員、金属技師などのコースがあり、見習い制度を取り入れた技術習得プログラムと、マーケティングなどの理論の両方を学びます。英語とコンピュータ技術の習得にも力を入れており、卒業試験に合格したら確実に就職できる仕組みになっているそうです。

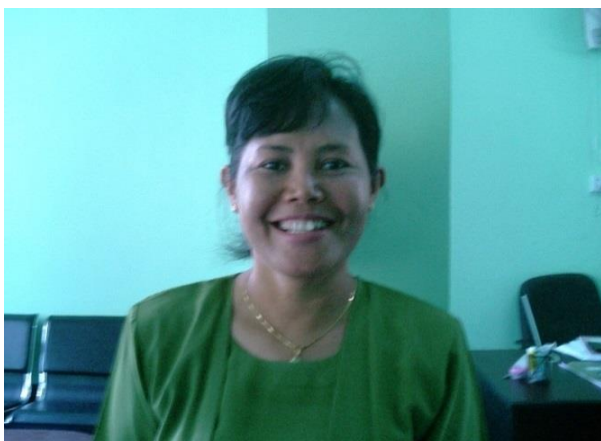


広報担当のツ・レインさん(左)と代表のイン・イン・エイさん(中央)

毎年数百人の卒業生を送り出していて、入学希望者が多く、すべての子どもたちを受け入れることができないのが悩みのようです。現在もヤンゴン市内の3か所に事務所やワークショップがありますが、数年後には大規模な職業訓練校を新設する予定で、建物の模型を見せていただきました。広報担当のツ・レインさんがインフォメーションセンターとのコンタクトパーソンになってくれるということで、相談者に提供できる情報の一つとして活用していきたいと考えています。

カウンターパート紹介：インフォメーションセンターの新スタッフ、ウェイ・ウェイ・ラットさん

ニューズレター17号でインフォメーションセンターのスタッフとして紹介したニー・ニー・ウィンさんは、マンダレーシェルター所長の辞職に伴い、急きょシェルターに戻らざるを得ない状況になっていました。新所長の赴任後は、ニーニーさんは4月に開設されたコータウンのシェルターに配属されています。インフォメーションセンターで働いてもらうことができなかったのは残念ですが、新しいシェルターが機能していくために、彼女の長い経験や能力を活かし、活躍されることを願っています。



インフォメーションセンターの新スタッフ、ウェイ・ウェイ・ラットさん
代わりに4月からセンターの職員として配置されたのが、ウェイ・ウェイ・ラットさんで、彼女も1回目のTOT参加者の一人です。大学の専攻はミャンマー語、ソーシャルワークのディプロマコースの卒業生で、1990年から社会福祉局で働いています。マンダレーの女性の

ための職業訓練校（シェルター）から始まり、障害者のための職業訓練校では講師として洋裁も教えるなど、彼女も現場の経験が豊富な方です。その後パインやパインの地方事務所に勤務したのち、インフォメーションセンターに配属されました。

TOTのトレーナーとしての経験について尋ねると、1回目のTOTは、それまで受けた研修と全く異なり、人身取引の被害者のサポートに焦点をあてた研修で非常に役に立った。特に人身取引被害者へのカウンセリング手法などを学ぶことができ、被害者との対応や人間関係づくりに活用することができた。またフォローアップ研修では日本人専門家から新しい考え方や手法を学ぶことができ新鮮だったし、より被害者への理解が深まったと思う。2回目のTOTでは自分が講師となったので（ジェンダー・セッションを担当）、準備が大変だったし、受講生がどう受け止めてくれるか不安で緊張した。しかし、教える準備の中でどうやら伝わるか随分と考えたし、受講生の反応から学ぶことも多く、この経験が一番自分に役立ったように思うと話してくれました。

「センターではどんな支援を目指しますか」と尋ねると、即座に「それは被害者の方が何を求めているかによります」という答え。「しっかり話を聴き、被害者の置かれている状況を理解したい、その上で彼女/彼のニーズにそってできるだけのことをしたい」。また、「直接自分が提供できる支援もあるが、できないことも多いので、ネットワークをどう活用するかが重要だと思っている」ということです。

「気晴らしは？」という質問には、パインにいた時は海の近くなので、週末は職場の仲間とビーチに行ったそうです。若いスタッフは海に入って遊びますが、彼女も含め少しシニアのメンバーは日焼けも気になり、しかし暑さには耐えきれず、服を来て傘をさしたまま海の中へ…。「傘を波に取られるたびに追いかけて大変だった！」と楽しそうに話してくれました。普段は家に帰ると水浴びをし、くだものと野菜中心の食事をゆっくりとることがリラックス法だということです。



本通信は、プロジェクトの進捗状況および周辺情報をお知らせするために専門家の見聞をお送りしています。JICA およびプロジェクトのカウンターパートの見解ではありません。禁転載